

オルタードコード &

3

オルタードスケール

Vol 3 : Getting out side series

hitoshikawai.com

For
guitarists



はじめに

オルタードスケールの前にディミニッシュドとホールトーンスケールを書きました。

オルタードスケールを「Getting out side series」3つのうちの最後にしたのは理由があります。

僕はアウトサイドのフレーズを始めた時、オルタードコードやスケールからトライしました。

オルタードエクステンションが次に来るコードトーンに半音で解決する事は分かりましたが、それだけでした。

しかしディミニッシュドとオーギュメンテッドを学んだ時に目から鱗が落ちました。

何と二つのミックスだったのです。

そういう理解が最初から得られたら、もっと確信を持って弾けていたのにと後悔したものです。

ディミニッシュドとオーギュメンテッドがシンメトリカルなのに対して、オルタードコードはそうではありません。

割り切れないのが何とも人工的に感じるのは僕だけでしょうか。

色んな眺め方があり、多くの人が指摘している通りです。

僕も気付く限りの視点を書いておきました。

それらをそのままなぞるだけで十分アウトフレーズになります。

内容

内容

- オルタードコード、オルタードスケール
- 半音上のm6、mmaj7コード、メロディックマイナー
- トライトーン上のドミナントコード、リディアン7 t h
- サブスティテューション
- トライアド、テトラッドに分割

一つのコードやスケールを別の視点でも捉えられると、理解が増します。

理解が増すと自信が持てます。自信が持てると抑制する力がついてきます。

抑制＝スケールをコントロールする。つまりあなたが音を選ぶようになります。

知性と感情をフル稼働させましょう。モノの見方、考え方が演奏に現れるようになります。

イメージ、ムードやタッチなども意識して練習しましょう。

間違ったはしご

スケールを覚えればアドリブができる...確かにそれだけでも少しは弾けるようになります。

でも、それは間違ったはしごを登るようなもの。

頂上に来たと思ったら間違った場所だったと気づいて、降りて、一からやり直さなければなりません。

この本ではコードを知り、その響きを操る事を推進しています。

マスターすれば各音の意味を把握しながら、自信を持って発音できるようになります。

複雑なスケールだけを覚えても上手くいかない3つの理由

1. コードトーンと関連付けられないので、緊張感を調整できない
2. 多角的な視点がないので、音の並びの選択肢が乏しい
3. 分解してトライアドやテトラッドやペントニックなどの素材として使う思考に至らない

スケールを学んでアドリブが少しできるようになると、必ずぶち当たる壁がこれです。

「スケールだけ弾いていても面白くない、アウトフレーズってどうやるの？」

「アウトフレーズが上手く弾けないのはどうして？」

これらはコードを学ぶ事によって解決します。

コードの重力に対して近い音、遠い音という価値判断基準を持てるようになるからです。

スケールは線という認識です。コードトーンと関連づけずにスケールをなぞると、宇宙を漂うのと同じです。

浮遊感を演出するために、重力（コード）を敢えて無視するかのようなスケールそのものをなぞるだけのテクニックもあります。

でもそれはコードトーンを制覇した者だけ（ブルースは例外）が得られる自由の領域です。

実は、ペントニックスケールやメジャースケールでも、コード的な視点を持つだけでフレーズのバリエーションは格段に増えます。

コードを変形させたり、音を重ねていくとアウトフレーズが可能だとずっと書いてきました。

今度はオルタードコード、スケールとそれを理解する上で重要な3つの視点を紹介します。

オルタードコード、G 7 alt (b9#9#11b13)

オルタードコード、G 7 alt (b9#9#11b13)

ルートと3rd、7thを除く全ての音がオルタードエクステンションというコードです。

それをスケールとして並べ替えたものがオルタードスケールになります。

これが普通の説明です。

ですが...

コンディミ（前半）とホールトーン（後半）をミックスした、オルタードスケールという考え方もできます。

ディミニッシュドスケールのb 9、# 9とホールトーンのb 1 3 = # 5が混ざったコードというわけです。

1 1 は普通のエクステンションと捉えましょう。

ディミニッシュドにもホールトーンにも普通のエクステンションにも共通しています。

1 1 thがアヴォイドノートなので当然なのです。

オルタードコードを眺めると、まず2つのコードが存在します。

- オーギュメンテッド 1、3、# 5 (b 1 3)、b 7
- ハーフディミニッシュド 1、b 3 (# 9)、# 1 1 (b 5)、b 7

つまりオーギュメンテッドやハーフディミニッシュとみなして、コードトーンで遊べます。

この2つのコードを弾くと、使っていない音はb 9だけです。

今度はb 9の音に注目すると、2つのコードが見えてきます。

b 9をルートに見立てて考えましょう。

- b 9からマイナーメジャー7
- b 9からマイナー6

これらはヘンテコに感じるかもしれませんが、ジャズの世界では常識です。

メロディックマイナースケールが完全にフィットします。

その説明は後にします。

このような見方をすれば、その他にもコードがいくつか含まれています。代表的なやつをもう一つ。

- トライトーン上のドミナント9（# 1 1）

下のリディアン7 t hスケールと併せて説明しています。

10通りの視点

- ハーフディミニッシュドコード
- オーギュメンテッドコード
- b9上のマイナーメジャー7コード
- b9上のマイナー6コード
- トライトーン上のドミナント9（#11）コード
- ディミニッシュドスケールとホールトーンスケールのミックス
- b9上からのメロディックマイナースケール
- リディアン7thスケール

オルタードコードやスケール以外に、8つの見方があります。

コードとして垂直に捉える方法が5つ、スケール上に水平に捉える方法が3つです。

上に書かれた通りの音の羅列を弾くだけでも、ネタとして使えます。

より多くの視点を持つとより柔軟に、また深く理解できるようになります。

確信を持って弾けます。音の選択の幅も広がります。

部分的、わずかな音、狭い音域で、慎重深くキメルというクールな遊びも可能になるでしょう。

ウェスモンゴメリーはさりげなくアウトする事も多く、抑制が効いています。

露骨に使うのが目立つマイクスターンも、さりげなくフレーズの中に溶け込むように弾いている事が非常に多いです。

とても自然で美しいです。

僕は以前、卑しい考えにとりつかれていました。

難しいスケールを知っているぞ、と見せびらかしたかった時期がありました。

ちょうど英語を話せない人が、辞書から難しい単語を調べてそのまま使っているようなものです。

「オレは英語を話せるぞ」、とカジュアルな会話に難しい単語を投げ込んで相手を困惑させる人がいます。

文脈上、自然に使われる単語とそうでないものの区別が付かないし、自分の知識を自慢したいというエゴむき出しの状態です。

無知をさらしているだけと気付かない、哀れな自分でした。

「効果的か？」という事を常に考えましょう。

脱線しましたが、さりげなく使う方が自然でカッコいい事もありますよ。

練習する時、「自分が音を操るのであって、スケールに操られるのではない」と意識するといいです。

音の並びをよく理解できていないと、ついフルに7音辿ってしまうので注意しましょう。

僕は、ディミニッシュドスケールやホールトーンスケールを学ぶ以前に、オルタードスケールを知りました。

オルタードコードと関連付けてはいたものの、それだけでは確信が持てませんでした。

「このスケールをドミナントコードで使えばカッコいい」と信じてやっていたのです。

最初はそれでもいいのです。

でも多角的な視点がなく、自分の言葉として昇華するに至りませんでした。

オルタードスケール＝ディミニッシュドスケールとホールトーンスケールをつなげたもの

オルタードスケール＝ディミニッシュドスケールとホールトーンスケールをつなげたもの

オルタードスケールそのものを覚えるよりも、まずディミニッシュドスケールとホールトーンスケールを学んでから（コードと関連付けて）、そのミックスと考える方がシンプルです。

ディミニッシュドスケールとホールトーンスケールのミックスには、3つの区切り方が可能になります。

- # 1 1 でディミニッシュドスケールとホールトーンスケールを分ける
- 3 r d でディミニッシュドスケールとホールトーンスケールを分ける
- # 9 でディミニッシュドスケールとホールトーンスケールを分ける

このように区別をするだけでも、バリエーションが豊富になります。

7音全てを使い切らないで弾くアイデアの一つです。

ホールトーンスケールにフォーカスすると、上から4音、5音、6音と使える音が増えます。

ディミニッシュドスケールにフォーカスすると、上から5音、4音、3音と減りますが、実はルートの下の7thも加えて使えばそれぞれに+1音となります。

詳細な意識と考え方が、スケールという一辺倒な考え方から解放してくれるのです。

落ち着いて、スケールの一部分だけを使う余裕ができるのです。

Abm6、Abmmaj7がG7の半音上にある、＝メロディックマイナースケール

Abm6、Abmmaj7がG7の半音上にある、＝メロディックマイナースケール

A b m 6 は 9 も加えると色々遊べます。

コードトーンだけ弾いてもアウト感が強く、効果大です。

何かの本で、チャーリーパーカー（ビバップの開祖）はこのようにみなしていたと読んだ記憶があります。

また、トンジョビン（ボサノバの父）はドミナントコードを書く代わりにそのままこのコードを書いていたようです。

このコードはメロディックマイナーにフィットするコードです。

m 6 というコードには敢えて 7 が表記されていません。マイナーコードでナチュラル 6 を使う時には 7 は使わない、もしくはナチュラルにする事が多いようです。

ナチュラル 7 の入ったその音の並び＝メロディックマイナーです。

ドミナントコードの半音上でメロディックマイナーを弾く、m 6 コードを弾くというアプローチは多くの人に愛されています。

ハーモニックマイナーより、幅が広く将来的なりターンが大きいです。

時間を投資するならハーモニックマイナーより、メロディックマイナーをお勧めします。

半音上の m 6 に、ドリアンモードを使う人も多く、その筆頭がパットマルティーノです。

G の音はベースが担当すると考えて、ドリアンでもオーケーとなるのでしょう。

D b 9 (# 1 1) = リディアン 7 t h スケール

D b 9 (# 1 1) = リディアン 7 t h スケール

このコードはGに対してトライトーンの関係にあり、b 9、# 1 1、b 1 3の音を与えてくれます。

コードトーンをなぞるだけで、いい感じに離れた響きが得られます。

リディアン 7 t h というスケールを紹介します。

リディアンというモードは、普通のメジャースケールの4音を#させたヴァージョンです。

D b 9 (# 1 1) と敢て書きましたが、スケールとしてでなく、コードトーンと扱うならば# 1 1 が当然使われます。

メジャーコードのエクステンションを辿ると、リディアンモードになると覚えましょう。

ドミナントコードのエクステンションをそのままを辿ると、リディアン 7 t h スケールになります。

コードトーンを辿ると# 1 1 となりますので、リディアン 7 t h という名前のスケールになります。

D b リディアン 7 t h はG 7 のオルタードスケールと全く同じ音の羅列です。

上に書いた、A b のメロディックマイナーもまさに同じ音の羅列です。

3つの見方をマスターするのもいいですが、自分が好きなものに特化するといいでしょう。

多くの人はメロディックマイナーを好み、色々と研究します。

パットマルティーノのようにマイナー系のスケールの方がインスパイアされるのかもしれませんが。

トライトーンサブスティテューションの2－5

トライトーンはG 7でいうとD b 7になります。

以前からディミニッシュドスケールの代理を説明してきました。

D b 9などコードトーンを弾くだけでもクールなアイデアです。

D bの5度上のA b m 9を好む人も多いです。ほとんど同じサウンドですが...

コードトーンを弾くとオルタードエクステンションの方をメインに弾くので、すごく外れた感じになります。

D bかA b mかどちらか一方という事でなく、A b mからD bの2－5の進行をを匂わせる手法もよく使います。

曲中のコード進行にもよく見られます。

ドミナントコードの半音上に代理コードの2－5がそのまま入っているみたいな場合があります。

逐一コード進行に沿って弾く事もできますが、オルタードスケールのコードトーンで対応すればしっくりいきます。

ドミナントとしてオルタードスケールで弾いた方が横のフローが自然になります。

落ち着いて構えていられます。私はこういう事が分かるまで、いちいちうろたえましたよ。

十分に慣れてきたら、今度はそこから自由になるように努めるといいですよ。

コードトーンをしつこく言及してきました。

スケール的な思考しかなかった人には全く違った可能性に驚いた事でしょう。

でも時間をかけてマスターした後、いずれコードトーンに縛られる事となるでしょう。

トライアド、テトラッドに分解

トライアド、テトラッドに分解

トライアド：

メジャー＝D b、D #

マイナー＝A b、B b、

オーギュメンテッド＝G、B、D #

ディミニッシュド＝G、F

テトラッド：

ドミナント＝D b、D #

マイナー＝B b、

オーギュメンテッド＝G、D #

ハーフディミニッシュド＝G、F

メジャー7（#5）＝B b

マイナー6＝A b、B b

マイナーメジャー7＝A b

このように分解して遊ぶ事ができます。

僕は、ホールトーンやディミニッシュドのように整然としたルールがないので避けています。

b9からのm6 9コードは好きで使っていました。

覚えにくいですが、もし気に入った響きのものがあったら是非使ってやって下さい。

僕も少しだけトライしてみようと思っています。

まとめ

まとめ

- オルタードエクステンションばかりを扱ったコード＝A l t
- オルタードコードはそのままオルタードスケールと一致する
- オルタードスケールはディミニッシュドスケールとホールトーンスケールを繋いだもの
- 半音上にm 6コードが存在する。メロディックマイナーが一致するので、オルタードスケールの代わりに使う人は多い。
- トライトーン上に、ドミナント9コードが存在する。リディアン7 t hというスケールが一致するので、オルタードスケールの代わりに使う人が多い。
- ドミナントコードの半音上に2-5が書かれている場合、オルタードスケールで対応できる。
- その他にもいくつかのトライアド、テトラッドができる

難解なスケールはこんな感じに色んな視点を持つ事で深く理解できます。

ただ単にスケールをなぞるソロから開放されます。

ネタが切れる事ありません。

難解そうなものも、実はシンプルな事の組み合わせにしか過ぎません。

シンプルなアイデアをやっていくことがカギだと思っています。

実はそこを悟る事が一番大切だと思い、ここまで書いてきました。

いかにシンプルなネタ、アイデアを使いこなせるか？

そうして初めて歌えるようになります。

気持ちを込めて弾けるようになると思います。

シンプルな型で練習しないとなかなかフレー징がきれいになりません。

だから複雑そうなアプローチは細分化して自分が完全にコントロールできる形に落とし込む事が大切です。

難しい単語ばかり並べ立てて、全然文脈にマッチしてないとか...そうならないためです。

今回の本の内容をマスターするにはかなりの時間がかかるでしょう。

でも少し慣れてきた辺りで、つまらなく感じると思います。

つまり、コードトーンの縛りに合う事が分かっています。

コードトーンすら知らなかった人には恐ろしく広大な地平線に感じた事でしょう。

圧倒されてしまっているかもしれません。

でも、がんばってマスターしても次の段階が待っています。

これまでは重力（空間）の緊張感についての話しでした。

次は時差からくる緊張感を作り出すアイデアになっていきます。

これはアンティシペーションとかディレイドリゾルブとか言われているヤツです。

僕はコードをストレッチすると呼んでいます。

ジャズセオリーという本の中で "stretching the chords" という説明が一番しっくり来たからです。

このアイデアは僕は大好きです。

オルタードエクステンションなどを使って緊張を出す事をせずに、強力な緊張感を醸し出せるからです。

またいずれこの事についても書きたいと思っています。

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

オルタードコードとスケール

著者 : hitoshi kawai

著者プロフィール : <http://www.hitoshikawai.com/about.html>